

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.036

目次

2017.9

- 平成28年度学内版GP成果報告
浜野 充講師, 杉本 光公教授
- 効果的な学修支援とIR
- 活動報告
- スタッフからひとこと



信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY

平成28年度学内版GP成果報告 vol.2

前号に引続き、平成28年度学内版GPに採択された取り組みをご紹介します。

また、現在、平成30年度学内版GPの公募を開始しております。今回は、『第三期中期目標・中期計画』の重点項目である次のいずれか（もしくは両方）に該当する教育取組を応募対象といたします。

- ▶ 受講生の主体的学修を促す工夫
- ▶ 受講生の達成感（＝自己効力感，等）を上げる工夫

詳しくは高等教育研究センターのホームページにてご覧いただけますので、ご興味のございます方はぜひともご覧ください。

<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/campus-gp/2017/06/17208.php>



学術研究院農学系 浜野 充 講師 「講義とフィールドをつなげたアクティブラーニングの促進
-農学の意義と可能性を見出す、農業・農村実地研修-

はじめに

本プログラムでは、海外協定校から留学生を受け入れ、伊那キャンパス（農学部）の学生が共に農業・農村のグローバル課題と解決に向けた取り組みを学ぶことで、農学の学修や研究に対する主体的意識を醸成し、さらに英語でのコミュニケーションや英語を取り混ぜた授業を経験することで、海外留学や実習・調査に踏み出すきっかけを作ることを目的とした。

参加した農学部学生：

- ・学生交流，視察：農学専攻修士課程3名，農学部生9名
- ・英語を取り混ぜた授業の受講者数：国際農学概論（2年生：約170名），飼料学（3年生：約60名）他，動物生産システム実習。動物資源生産学特論等。

活動内容

▶インドネシア・ジャンピ大学（UNJA）との交流：

長野県の農業・加工業の紹介，博士課程・修士課程学生による資源循環型飼料生産に関する研究紹介，農学部オープンキャンパスでの研究室訪問，本学部研究フィールド訪問（高遠：耕作放棄地での羊放牧），AFC野辺山ステーションでの農場実習・共同調理・JAハケ岳白菜農家・集荷施設視察，県内食品加工業視察，ディスカッション・プレゼンテーション。



↓UNJA学生との農業課題に関するディスカッション



▶バングラデシュ国立農業大学（BAU）との交流：

伊那市長谷での農家民泊ヒアリング・花卉農家視察，ディスカッション，農学部講義（国際農学概論，飼料学等），専攻演習への参加，BAU学生によるバングラデシュ農業および社会・文化・歴史についてプレゼン（国際農学概論）。



BAU学生との農村視察

学生交流参加学生(本学)の主体的な学修・研究・海外留学へのステップ

参加学生のレポートやヒアリングから、国内の農業・農村の課題や魅力について理解を深め、海外の農業についても興味を持つようになり、英語でのコミュニケーションにも積極的に取り組んでいた。

本プログラム参加後の学部生9名のフォローアップ調査を行った結果、ほとんどの学生が海外での農学実習参加や農村調査の実施、長期留学に挑戦している。

➢海外農学実習への参加：ネパール（2016年9月）3名、カンボジア（2017年2月）5名

➢海外での農村調査実施（専攻研究）：カンボジア1名（小規模養豚業）、ネパール1名（農業高校教育の現状と課題）、モンゴル1名（森林実態）、ベトナム1名（国際シンポジウム、農村調査）

➢GEC交換留学プログラムへの参加：1名（オーストラリア1年間）

一方で、3人が上伊那地域の農村の課題と課題解決に

向けた地域の取り組みについて意欲的に卒業研究を進めている。（農家民泊、耕作放棄地、学校給食の自給等）



カンボジアでの王立農業大学との合同農村調査

海外の留学生と交流し、さらに積極的に海外の農業・農村を経験することが、国内外の農業の課題や魅力とともに農学の役割に気づききっかけとなる。学生自身が現状と将来の方向性を考えながら、より主体的な意識で学修・研究に取り組んでいくことが期待される。引き続き、国内で留学生と交流しながら国内外の農業・農村の課題について学び、体験する機会を広げていきたいと考える。

学術研究院総合人間科学系 杉本 光公 教授

「体育の授業「信大マラソン」における自己効力感の向上の取り組み」

学生と一般参加者が交流しながらマラソンを楽しんだ

2016年10月2日（日）信州スカイパークにおいて、信州大学マラソン2016が行われた。



この大会は信州大学の共通教育の体育の授業の一環であるが、一般市民の参加もできる大会として実施している。昨年度は、濱田学長がスターターを務めて下さった。学生74名、一般21名の計95名の参加者であった。天気もよく学生と一般参加者が交流しながら秋の信州を走り抜けた。



濱田学長

参加95名中、一般参加者は、全員完走した。学生は74名中、フルマラソンを44名、ハーフを30名が完走し、フルマラソン完走率が6割を超えており、非常に完走率が高いものとなった。学内版GPIに採択されたことにより、信大マラソンのOBをサポーターとして雇用し、本番までに週2回の自主トレーニング指導を行った効果があらわれたと思われる。

完走率60%以上の理由

学生は、これまで月に1回、合計4回の講義を受けている。内容は1回目にウォーキングのフォームと基礎トレーニング方法、2回目がランニングフォームとストレッチ、3回目にハーフマラソンのペース配分と本番までのスケジュールリングである。これらを通して、どれくらいのペース配分で走れば完走できるか、自分で管理することができる。

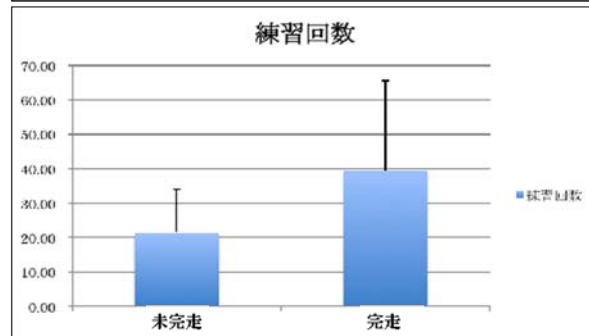
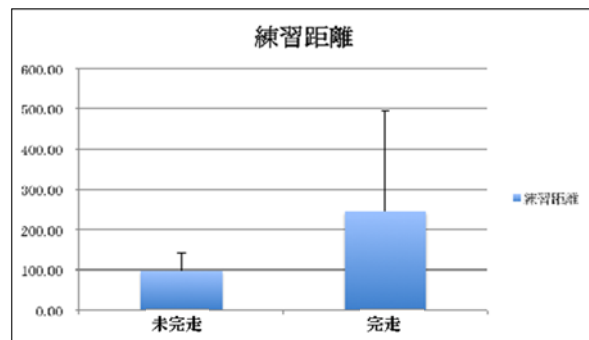
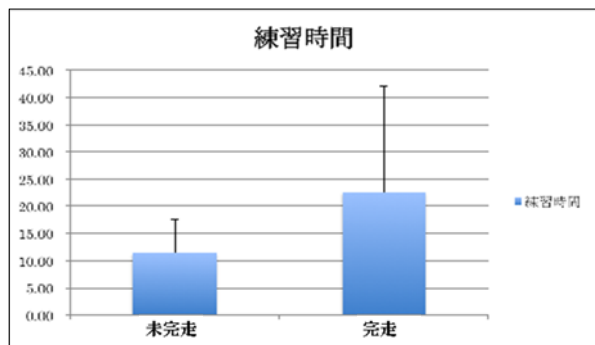
また大会後のレポートによると、完走することによる達成感や「自分はやればできる」といった自己効力感を得たものが多数あった。また、学生が自主的に企画や管理に関わることで、さらに一般の参加者が参加することで地域との協働を意識するなど、信大生としてのアイデンティティを醸成する一助となった。



自主練による結果の違い

フルマラソン完走者と完走できなかったもので、練習時間、練習回数、練習の距離を比較したところ、全てにおいて、フルマラソン完走のグループが大きな値を示した。自主練の重要性が認められるとともに、フルマラソン完走の

ためのある程度の基準の練習量が明らかになった。
 今後はこれらを参考に授業中および授業外での練習量の確保に努めて行く必要があると思われる。



効果的な学修支援とIR



大学人として、様々な場面で「学修支援」という言葉を目にします。しかし、時には戸惑いを感じる場合もあります。「学修支援」という言葉以外に、「学習支援」、「学生支援」、さらに「修学支援」などの類似した用語も政府の公文書、研究に多く用いられているためです。一体「学修支援」は、何を指すのでしょうか。その具体的な支援の内容は何でしょうか。

今回のニュースレターでは、まず、学修支援の定義とその内容についてレビューを行います。その上で、教学IRの学修支援のための運用について紹介して、その限界について分析します。さらに、効果的学修支援を実施するためには何をすればよいのかについて、学修支援とIRの将来の方向性について検討します。

学修支援とは何か？

「学習支援」、「学生支援」、「学修支援」等々、普段何気なく使われている用語ではありますが、細かいところに相違があります。「学習支援」は、科目履修、単位取得、さらに学習活動という学業への支援を指すのに対し、「学生支援」は学業以外に、「経済支援」、「生活相談」、「就職支援」等々の大学生活全体を包含する意味として使われています(沖2011)。

一方、「学修支援」は、「学生支援」に近いような意味で使われている場合が多いです。(杉本 2013)。しかし、それぞれは定まった定義はまだあるわけではありません。独立行政法人大学改革支援・学位授与機構は、学習支援と学修支援を同一の意味として使い、学習(学修)支援について、「高等教育機関において、学生が教育課程を効果的に遂行するために整備された総合的な支援体制、履修指導や学生相談、助言体制の整備など」と定義しています。(大学改革支援・学位授与機構、2016)。用語に関して細かいところに相違があるものの、大学における学業と生活を順調に営むために大学側が提供する支援という意味では概ね共通しています。

定義はさておいて、実際学修支援の具体的な内容はいかなもののでしょうか。この疑問に答えるためには、評価団体による学修支援の評価基準を見るのが一番手取り早いです。大学評価・学位授与機構の基準として、「7 施設・設備及び学生支援」のなかで、「(7-2) 学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習、課外活動、生活



や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること」と定められています(大学評価・学位授与機構、2004, p.22)。大学基準協会では、「6 学生支援」として、「留年者および休・退学者の状況把握と対応の適切性」「補習・補充教育に関する支援体制とその実施」「障がいのある学生に対する学修支援措置の適切性」「奨学金等の経済的支援措置の適切性」の4項目が挙げられています(大学基準協会、2016)。要するに、認証評価の中では、「学習支援」「学修支援」は、「修学支援」として、学修の阻害要因となるものを排除していこうとするものが多いように読み取れます。

学修支援の定義と内容については、よく分かったものの、実際大学教育現場の一員として、頭を抱えるもう一つの問題があります。学修支援のニーズ、そして学修支援の必要な学生をどのように特定するのでしょうか。

教学IRと学修支援

その時に、よく活用されるのはIRです。IRとは Institutional Researchの略語で、大学の経営改善や学生支援、教育の質向上のため、学内データを収集・分析し、改善施策を立案、施策の実行・検証を行うといった広範な活動を指します(沖・岡田、2011)。平たく言えば、

調査を通して、問題点を析出し、その改善策を評価する取り組みと言えます。

近年IRは、学生の学部4年間の学習経験の把握、学生のニーズと課題の析出に広く使われ、その結果を学修支援へ活用する実践が日本の大学で急速に広がりました。例えば、関西国際大学、金沢工業大学、島根大学、京都光華大学などの大学は、学生調査を通して、留年、休学、退学者に対する諸要因の析出によって、そのリスクを回避するような支援を実施する先事例であると言えます(肥後、

2013; 藤木, 2014; 光永・原田, 2016; 水野, 2016)。最近では、学生のニーズに応じて、効果的な支援を与えるために、IRを通して、学生タイプを析出した上で、タイプ別の支援を行うことがIR研究者を中心に提案されています(大多和, 2016; 溝上, 2004, 2009; 高橋・星野・溝上, 2014; 藤木, 2014)。その他、早稲田大学では、学内奨学金が必要な学生に届いているか、奨学金受給によって学業が進捗しているかという、学生の学習以外の支援に関するIRを活用する実践も行われています(吉田他, 2016)。

信州大学においても、教学IRが学修支援のニーズを析出するために運用されています。本ニュースレターの32号と35号で紹介した「学習時間調査」の結果に対する分析がその一例です。32号では、勉強も部活動もアルバイトもしない「孤独な学生」が少数ながら一部存在していることを明らかにしました。35号では、自宅以外で学習を行わない、図書館、生協などの大学施設の利用率が低い学生も「孤独な学生」と捉えて調査した結果、そういったタイプの学生はGPAが低くなる傾向が見られます。「孤独な学生」が適応困難と学業不振を同時に引き起こしていることから、早期発見と支援提供の必要性があると指摘しました。

IRの学修支援への実践の課題

しかし、IRを使って、学生の支援を実施する際にはいくつかの難点があります。

①支援の必要な学生を早期発見することが重要と言いながら、アンケート調査のみに頼るなら、どれほど早くとも半年から1年後にならなければなりません。これは、進学早々、関連調査のデータが限られている新入生の中では一層突出した問題となります。「目の前にいる個々の学生」を対象に、タイムリーな支援を与える方法を新たに考えていく必要があります。②プライバシー保護の観点で、本学の調査は殆ど匿名方式で行われています。その結果、要支援の学生を特定することが困難です。そのほか、③たとえ要支援の学生を特定し、支援のプログラムを用意したとしても、それが必要な学生は来ない、あるいは来たとしても途中で来るのを止めてしまうという問題があります。

したがって、通常のアンケート調査と併行して、より効果的に学修支援を実施するためには、アンケート調査を待たずに学生のニーズを洗い出し、それぞれのニーズが生じたタイミングで学修支援を用意する方法が考えられます。紙幅の関係で、詳しい説明は省略します。実際、上記の課題を解決するために、本学には初年次セミナー「大学生基礎力ゼミ」という画期的な試みがあります。これについて、また別の機会で紹介させていただきます。(李 敏)

※本稿は加藤善子・李敏・加藤鉦三「学修支援における理論と実践、およびデータとの対話—信州大学における試み—」高等教育学会第20回大会(東北大学2017年5月27日)の発表内容を踏まえたものです。

参考文献については、高等教育研究センターのHPに掲載されています。

活動報告

平成29年度FDカンファレンスを実施しました。



中島先生の講義の様子

「2017年度信州大学FDカンファレンス」が8月24日(木)・25日(金)の1泊2日の日程で、ビレッジ安曇野にて行われました。今年度は「(先生じゃなくて)学生ががんばる授業の作り方」というテーマで、学内各部署及び学外から総勢29名の参加がありました。

講師として常葉大学健康科学研究科の中島登代子教授をお迎えし、「学生をやる気にさせる作戦、その1」をテーマに、全員参加の講義をしていただきました。

また、高等教育研究センターの教員が講師となり、それぞれ「大学のアウトカム、私のアウトカム」、「シラバス研修基礎編」、「ICTを授業に活用する」、「科研費申請研修」、「授業デザイン研修(シラバス研修上級編)」、「信大生の学習について」をテーマとしたFDを行いました。

終了後のアンケートでは、「学生に対する教育に関して改めて考える良い機会となった。」、「他学部の教員と交流できてよかった。」などの感想が多く寄せられ、大変有意義なFDとなりました。

スタッフからひとこと

本センター主催のFDカンファレンスが、8月24日・25日にビレッジ安曇野で開催されました。そこでは、日頃の教育・研究活動の取組みや課題について真剣に議論されている先生方の姿がありました。他学部の先生方と膝を交えて話し合う機会の重要性を再認識しました。今後とも継続していくつもりです。ひとりでも多くの方が参加いただけるよう願っています。

(高等教育研究センター長 平野 吉直)

